７．乾しいたけ・原木生しいたけ

（１）被害の発生様相

１）伏せ込み地における入れ木の種菌活着・伸長不良と高温障害

①植菌後（主に３月～５月頃）に、高温や少雨等の影響で入れ木の乾燥状態が続くと、地域や地形によっては種菌の初期活着の不良が懸念される。

②空梅雨や早期の梅雨明け、夏場の少雨等、長期間（約２週間以上）に渡って高温乾燥の状態が続く場合は、菌糸の材内伸長に悪影響を及ぼす恐れがある。

③１年目、２年目の入れ木ともに高温障害を引き起こす恐れがある。

２）ほだ場内のほだ木の損傷

①過乾燥によるほだ木の損傷が懸念される。

（２）対策

１）伏せ込み地における入れ木について

①笠木や遮光ネットのずれ、損傷等を確認し、入れ木に直射日光が当たる場合は早急に補修する。なお、遮光ネットを使用する場合は、笠木の薄掛け等により入れ木との空間を 20cm ほど空け、両サイドは包み込まず、裾を広げることで通風を図る。

②下刈りは全面刈りでなく、入れ木の列の両サイドを部分的に残すなど、地形や風当たりを考えて、過乾燥にならないように工夫する。

③散水が可能であれば、１週間に１回２～４時間程度、日没以降の時間帯に水分の供給を図る。〔日が当たり、気温が上昇する時間帯に散水すると、高温湿潤害菌（ヒポクレア属菌など）の被害を受ける確率が高くなるため〕

２）ほだ場内のほだ木について

①散水施設を活用し、１週間に１回２～４時間程度、日没以降の時間帯に水分の供給を図る。